C・カダリー著

『わが生涯とICU——南アフリカにおける1アフリカ人労働組合運動家の自伝——』

Clements Kadalie, *My Life and the ICU……The Autobiography of a Black Trade Unionist in South Africa——*, Frank Cassk Co Ltd., 1970, 230p.+xvi.

I

「1918年，流感が流行していた頃のある土曜日の午後，私はニャサランドの2人の友人とケープタウンのダーリング街を歩いていた時，偶々，ケープアルガス紙を買い求め，その記事を読んで戦争が終わりに近づいていることを友人達に話した。……突然，ヨーロッパ人の警官が現われ，私を歩道からつき出し殴りかかってきた。……1人のヨーロッパ人が現われ，事情をたずねて私に名刺をくれ，翌日訪ねてくるように言った。……翌日，このアフリカ人への同情者を訪ねた。かれの名はA・F・バッティであった。……かれは港湾選挙区の補欠選挙に立候補しており，私に選挙の手伝いを頼んだ。しかし選挙に敗れたあと，私を呼んで労働組合の結成の当否について討議し，その結果，私はケープタウン港湾労働者の組織化を計画した。

……1919年1月17日，バイテンクラフト街のエクセレシアホールで第1回会合が開かれ……万場一致で組合結成が決議され，名称は『商工組合 (Industrial and Commercial Union)』ときまり，バッティの動議で私が書記長に選ばれた。」(pp. 39—40)

このような経緯で，南アフリカの最初のアフリカ人労働組合は，ニャサランド生まれの1アフリカ人によって生まれた。

それでは，ICU の初代書記長C・カダリーとはどのような人物か。また，ケープの港湾労働を中心に結成された1小組合が，1924年には組合員3万人，26年には3万9000人，絶頂期の27年には10万人と，わずか数年間で全国的に組織を拡大したが，それをなしとげる基盤となった ICU の性格はどのようなものであったか。白人政府による人種差別政策の激しい南アフリカで，ICUと白人政府との関係はどうであったか。わずか10年間で，この組合が解体した理由は何か。

南アフリカ労働運動史上，最初の非白人労働組合に対するわれわれの関心は，幸い2年前 ICU の生みの親であり育ての親でもあるC・カダリーの自伝という形で公表され満たされた。もちろん，この記述の中には，記憶のあいまいさから起る間違い，故意による事実の歪曲は当然考えられるが，それは南ア労働運動史資料としての重要性をそこなうものではない。

以下，まずはじめに，カダリー自身の記述を中心に内容を紹介し，その後S・W・ジョーンズ3世，M・ホレル，E・ルー等の研究を照合しながら前記の疑問に答える形で問題を検討していきたい。

つぎに，本書の章別構成を記しておこう。

S・トラピドによる序文
W・スチュアートによる草稿への序文
I．わが少年時代
II．ICUの誕生
III．燎原の火
IV．ヘルツォークに会う
V．黄金の都
VI．禁令に挑戦する
VII．ヨーロッパへの旅
VIII．国際的舞台で
IX．南アフリカへ還る
X．キンバリー会議とナタールの決裂
XI．パス法と戦う
XII．ヨーロッパ人の相談役
XIII．イースト・ロンドンでのゼネスト
XIV．居住権
XV．ヘルツォークの諸立法とその後
XVI．ICUとは何か

II

C・カダリーは19世紀末（出生年月日は不明）ニャサランド（現在のマラウィ）で生まれ，1896年洗礼を受けた。スコットランド・ミッション・スクールで初等教育を受けたのち，1913年同校の先生となったが，15年には故郷を離れてポルトガル領東アフリカ（現在のモザンビーク）の棉花プランテーションやローデシアの鉱山等で事務職として働いた後，18年南アフリカのケープタウンに出た。そこで偶々前述の事件に会い，ICUを組織し，書記長に選ばれた。ICU結成後の最初の活動は，第1次

世界大戦後のインフレと南アフリカ国産の食糧輸出に伴う国内価格の騰貴に対する闘いであった。ICUは非白人の賃金引上げ要求を掲げて1919年12月17日から3週間ストライキを行なったが，結果はわずかな賃上げを勝ちとったにすぎなかった。1920年1月の総会には参加者は400名を越え，同年8月の執行委員会では，ケープタウン造船所の最低賃金制要求を掲げた。しかし，11月にはカダリーは移民法 (Immigrants Regulation Act, 1913) に抵触し，国外退去を命じられた。当時の内務相がスコットランド出身であったことから，自分が洗礼を受けたスコットランド教会の助けをかりて21年1月に退去命令を撤回させた。(Ⅰ・Ⅱ章)

1922年には，南アフリカ労働運動史上最大といわれるラントのストライキが白人の鉱山労働者によっておこされた。その際，ICUがとった立場は消極的で，ただアフリカ人鉱山労働者がまき添えにされるのに対し抗議したにとどまり，その間，カダリーは ICU の組織の拡大をはかった。まず，ポート・エリザベスでJ・A・ラ・グマと協力し，ついでイースト・ロンドンではルジザを支部長とした。1923年1月にはケープタウンで統一会議を開き，17の支部が加わり，ケープ州内の組織化は終わった。その会議の決議として「当組織はいかなる政治団体とも関係なく，ただ，憲法に基づく産業組織を通して全アフリカ人の経済的・社会的向上をはかることを目的とする」(p. 56) とした。さらに，本部をケープタウンに置き，機関紙 *The Workers' Herald* を発刊することが決まった。(Ⅲ章)

1924年5月，アフリカ人民族会議 (ANC) のブルムフォンティン会議に，ICU 代表として出席したカダリーは，当時のスマッツ政府を支持するか，野党のJ・B・M・ヘルツォークを支持するかの選択を迫られ，結局，後者を支持した。そのため会議後，カダリーはヘルツォークに個人的に招待を受け会っている。

1924年7月，カダリーは組織拡大のためにダーバンに出掛けたが，同年6月に成立した国民党・労働党連立内閣の首班ヘルツォークは，カダリーのダーバンでの活動を妨害する手段に出た。しかし，最終的にA・P・マドゥナをナタール支部長として組織化には成功した。(Ⅳ章)

ついで，カダリーは1924年9月金鉱でにぎわう「黄金の都」ヨハネスブルグの組織化に着手した。最初ANCの反対に会ったが，2カ月後には組合員1000人以上を獲得し，さらにオレンジ自由国の首府ブルムフォンティンにも出掛け，12月組織拡大に成功した。その後いったんケープタウンに帰ったカダリーは，翌年1月再びブルムフォンティンで鉱山労働者を対象に白人資本家攻撃演説を行ない，その演説は *Rand Daily Mail* 紙に大きく報道され，鉱山会議所や政府もそれを無視できなくなり，1925年の国会はこの演説をめぐって激しい討議がなされた。

同年4月，ICUの第5回総会がヨハネスブルグで開かれ，ヘルツォーク内閣による civilized labour policy (注1)，パス法(注2)，原住民労働力補塡制度，産業調停法に基づく組合の登録等の議題が討議された。その結果，ICUは政府に非白人労働者の困窮の状態を調査するよう要求した。それに答えて政府は同年クレイを委員長に任命し「経済・賃金委員会」を組織し，調査結果は翌年発表された(注3)。かくして，1925年までにはICUは実質上全国的な労働者組織となり，この時期，最大の闘争目標としてパス法廃止を掲げた。また，同年カダリーはアメリカのニグロ労働者会議より招請を受けたが，政府がパスポートを発行せず実現しなかった。

1926年の第6回総会で，本部をケープタウンからヨハネスブルグへ移すこと，また ICU の国際労働組合連合 (IFTU) への加盟が決議されたが，同年にはICU内部で共産党との関係が表面化しICU内部の数名の共産党員がカダリーの方針をブルジョワ路線であるとして批判し始めた。(Ⅴ章)

1926年のナタール集会へ出席した後，ヨハネスブルグに戻ったカダリーは，ナタール法 (No. 48) により，ナタール再入国を禁じられたため，その措置に抗議して訴訟を起こし9月に開かれた裁判の結果勝訴した。

共産党との対立は一層きびしくなり，1927年4月には，正式に共産党と手を切り，さらに，ダーバンで開かれた第7回総会では，(1)ジュネーブで開かれる国際労働者会議へICU代表としてカダリーの出席，(2)白人労働者との提携が決議された。(Ⅵ章)

1927年5月ヨーロッパに向けて出発したカダリーはイギリス，フランスを経由してジュネーブの会議に出席した。会議では南アフリカの非白人労働者の実情を述べ，ICU の IFTU への正式加盟を主張した。帰途再びロンドンに寄りイギリス労働党員との接触を深める一方，10月にはイースト・エンドのメモリアルホールでの集会に出席し，同時期，南アフリカ議会に上程されていた原住民行政法案に強く反対する演説をした。さらに，オーストリア，ドイツも訪問し，27年11月南アフリカに帰国し

た。(Ⅶ, Ⅷ章)

1927年12月キンバリーで開かれた集会では，カダリーはヨーロッパ旅行から得た経験をもとにして，ICUを純粋な労働者組織にするために綱領を改定することを主張し討議の結果可決された。翌年の復活祭にブルムフォンティンで開かれた会議で，ダーバン支部の財政の不正支出が問題となり，ダーバン支部に事件究明に行こうとするカダリーはダーバン組合員に拒否され，支部はICUから分裂した。(Ⅸ, Ⅹ章)

1928年4月のプレトリアでのＡＮＣ主催の集会で，カダリーのパス法反対の演説が *Star* 紙に報道され，そのため原住民行政法第1条によりカダリーは逮捕されたが，裁判の結果無罪となった。(Ⅺ章)

同年7月，ICUの組織の強化をはかるためにイギリスからW・G・バリンジャーが到着した。しかし，カダリーの方針とは合わず，1929年には ICU は解体し，その結果，(1)バリンジャー派，(2)ナタール派（チャンピオン），(3)独立派（カダリー）の3派に分裂した。(Ⅻ章)

1930年1月，独立派はイースト・ロンドンで集会を開き，鉄道・港湾労働者の最低賃金制を要求してストライキに入ったが，ストライキの指導者達は逮捕された。第一審でカダリーには200ポンドの罰金が課せられたが，最終審で25ポンドに減刑された。(ⅩⅢ章)

しかし，判決後のカダリーは，暴徒集会法（No. 27, 1914）の適用を受け，6カ月間ヴィットヴァーテルスラント地区での活動を禁止された。その結果，イースト・ロンドンのイースト・バンク・ロケーションに移った。(ⅩⅣ章)

イースト・ロンドン移住後のカダリの活動は，当時議会に上程されていた，いわゆるヘルツォーク原住民諸立法の一つで，ケープ州内のアフリカ人の参政権の剝奪を目的とする「原住民代表法」案に対しての闘いであったが，同法案の可決後，再びイースト・ロンドンの鉄道・港湾労働者の問題を中心に活動をはじめた。(ⅩⅤ章)

最終章で，カダリーはICUの意義を述べ，第1次世界大戦後のアメリカ・ニグロ運動(パン・アフリカニズム)や共産党（コミンテルン）の影響を受けずに，産業分野で非白人の最初の労働組合を設立したこと，南アフリカの白人労働組合（SATUC）との連携には失敗したが，あらゆる階層の構成員を動員し，かつ南アフリカ全土に組織を拡大し，またIFTUを通じてヨーロッパの運動とも連携し得たこと等を評価するとともに，解体の原因として，経験ある指導者層の欠如，ナタール支部の財政上の欠陥，ヨーロッパ人相談役との方針の相違をあげている(ⅩⅥ章)。

以上，本書の叙述にそって ICU の結成，発展，解体について記してきたが，以下，ICUに関するいくつかの研究を踏まえて，問題を検討していきたいと思う。

（注1） 1924年の *Official Circular* (No. 5, 31, Oct., 1924) に依ると，「civilized labour とは，その生活水準が普通のヨーロッパ人的見地からみて堪えられると一般に認められる水準の考えによってなされる仕事であり，uncivilized labour とは，その作業を行なう目的が，野蛮人や非文明にみられるように生活必需品の獲得だけに限られるような人々によって行なわれる仕事」と規定されている。

（注2） (a) すべての人種にではなく，特定の人種のみに適用され，

(b) 移動の自由を制限し，

(c) たえずパスを身につけていなければならない。そして当局の要求に応じて，いつでも提示し，もしできなければ，拘引されうる。

（注3） *Report of the Economic and Wage Commission* (1925) U. G. 14—26.

Ⅲ

Ⅰで提起した問題点を以下のように整理して考察をすすめていくことにしたい。

(1) C・カダリーの人物評価

(2) ICUの性格（労働者組織か政治団体か）

(3) 1924年の ICU のヘルツォーク支持の問題

(4) 解体の原因をめぐって

E・ルーはカダリーの性格を「休みなきエネルギーをもつ男，生まれつきの弁舌家，有能な組織者」(注1)としているが，前述したカダリーの活動をみると確かに精力的であることは首肯されよう。カダリーはニャサランド生まれのため南アフリカの公用語の一つであるアフリカーンスもまた南アフリカのバンツー諸語も話せず，各地の集会での演説はみな英語で行なっているが，それにもかかわらず聴衆から熱狂的な歓迎を受けている点はやはり生来の弁舌家であったと思われる。さらに，組織の拡大に際しては，たとえばポート・エリザベスでは地元の実力者マサバララを排して南西アフリカからラ・グマを呼び寄せて支部長にする等，人を見分け組織の強化をはかる能力にすぐれていたことは確かであろう。また後にICU解体の一原因となったナタール支部の指導者の財政不正支

出に対して明確な態度をとっていることも組織者としての条件をそなえていたといえよう。

第2の ICU の性格の問題に移ろう。

1923年1月のケープタウン統一会議で「この組織はいかなる政治団体とも関係なく，ただ憲法に基づく産業組織を通して全アフリカ人の経済的・社会的向上をはかることを目的とする」と決議しながら，翌年には早くもヘルツォークの国民党を支持していることから，ICUの性格については様々に議論されている。

第1に，M・ホレルは ICU の「組合員の何人かは産業労働者ではなく，現在の概念からいえば労働組合運動というようむしろ大衆運動 (mass movement) であった」(注2)として ICU の労働者組織としての性格を否定しているのに対し，E・ルーは「結局，ICUは厳密な意味において，経済的性格を失い，国民解放のための政治集団 (political mass party) となった」(注3)とし，また，S・W・ジョーンズ3世も「カダリーは，目的を追求している内に明らかに政治活動に引き込まれ……かくして1926～27年には，ICUは益々政治活動を目ざす組織に発展していったように思われる」(注4)として ICU の性格の変化に力点を置いている。M・ホレルの見解は組合員の資格を問題にし，1924年の産業調停法によって，法律上アフリカ人労働者が被雇用者から除外されたという規定に基づいていると思われるが，実質的には ICU の組合員は産業労働者であるので首肯し難い。一方，E・ルーとジョーンズ3世の見解に対しては，変質の時期が問題となるが，ジョンズ3世はその時期を1926～27年としている。この点筆者は1925年4月のICU第5回総会の決議「……原住民の全国的労働組織をアフリカに創ることを目的とし，それによって，白人独裁を粉砕し，かつ鉱山や農場における搾取を阻止し，賃上げを勝ちとらねばならない。さらに，白人独裁支配の下で，議会の門戸を開き，世界中の白人労働者と共に，資本主義体制を打破し，英連邦内でアフリカ原住民に適した政体をつくること」(注5)(傍点引用者）を重視し，この時期を ICU の性格変化の時点と考えたい。

第3の1924年のヘルツォーク支持の理由として，カダリーは「政府の交替は必要であったし，南アフリカのためにもなるであろう」(p. 58) とだけ言っているが，この点に関しS・ニアメは以下の理由を上げている(注6)。(1) 1921年の南西アフリカのブルフック暴動，1922年のランドのストライキ等の際におけるスマッツ政権の態度に対する反発，(2)ケープの労働党員との接触からの影響，(3)非白人労働者の直接の敵であるイギリス系白人資本家とそれと結託したスマッツ政権への反感，(4)政権につく以前に示した国民党の ICU に対する好意。たとえば，1921年にD・F・マランはクインズタウンで開かれた原住民集会に，原住民ほど南アフリカに対する愛国者はいないむねの電報を打っている。つまり全体としてはイギリス帝国主義への反発であるとする。事実，前年の機関紙 *Workers' Herald* 発刊に際しては，国民党・労働党からかなり資金が流れていること，また，この時期 *Workers' Herald* 紙にイギリス帝国主義に反対する多くの記事が載っていることを指摘しているニアメの説はほぼ首肯し得る。

第4の ICU 解体の原因については，カダリーは最終章で，(1)経験ある指導者層の欠如，(2)ナタール支部の財政の不正支出と支部の分裂，(3)ヨーロッパ人相談役との方針の相違の3点を上げている。それに対し，M・ホレルは，(1)1925年本部がケープからヨハネスブルグに移され組合活動においてアフリカ人よりも経験が豊富なカラードの協力が減ったこと，(2)1926年末，共産党員を追放したこと，(3)膨大な組織自体が非常に雑駁であったこと，幹部の多くは経験に乏しく，機関紙 *Workers' Herald* 発行によって莫大な負債をかかえたことを上げている(注7)。

両者に共通する指導層の問題については，指導層にはカダリーも含めて教員出身者が比較的多く，組合活動や政治闘争の経験が乏しかったことは確かである。その他の指摘された原因については，カダリーの指摘が直接原因，ホレルの指摘を間接原因と位置づけてよいのではなかろうか。

最後に本書のもつ意義についてふれ結びとしよう。

序文によると，本書の第1草稿は1946年に脱稿されているが，今日の形で出版されるまでには数名のものの協力によって正確を期すための加筆修正がなされている。その意味で，自伝に起こりがちなひとりよがりはある程度減殺されている。だからと言って，カダリーの個性が本文から全く失われたというのではない。むしろ一読して感じられるのは，著者カダリーの強烈な個性とヴァイタリティである。

今まで南アフリカ労働運動史の研究は，E・ルーの書が一応オーソドックスなものとされてきたが，近年ハーヴァード大学出身のS・W・ジョーンズ3世が本書のもとになったメモワールや *Workers' Herald* 紙等の一次資料を使って精力的に研究を進めている。とくに資料の入手やとりあつかいのむづかしい労働運動史の研究にと

って，本書は公表された形での重要な資料であることは間違いない。

（注1） Edward Roux, *Time Longer than Rope —A History of the Black Man's Struggle for Freedom in South Africa*, The Univ. of Wisconsin Press, 1964, p. 153.

（注2） Muriel Horrell, *Racialism and the Trade Unions, S. A. I. R. R.* 1959, p. 5.

（注3） E. Roux, *op. cit.*, p. 161.

（注4） Sheridan W. Johns III, "Trade Union, Political Pressure group or Mass Movements? The Industrial and Commercial Workers' Union of Africa" (R. I. Rotberg and A. A. Mazrui, eds., *Protest and Power in Black Africa*, O. U. P. 1970 所収) pp. 750—751.

（注5） *The Workers' Herald*, May 15, 1925 (S. W. Johns III, *Ibid.* p. 695 より引用)

（注6） Sylvia Neame, "The ICU and British Imperialism" (Univ. of London, Institute of Commonwealth Studies, Oct. 1969—Mar. 1970, No. 10 *Collected Seminar Papers on the Societies of Southern Africa in the 19th and 20th Centuries* Vol. 1 所収), p. 140.

（注7） M. Horrell, *South African Trade Unionism, S. A. I. R. R.* 1961, p. 66.

（調査研究部　林　晃史）

調査研究双書　　アジア経済研究所刊行

高梨博昭編
フィリピンの金融事情
410頁　2000円

フィリピンの金融制度について，その背景と発達の歴史を概観し，各種金融機関の実態，金融政策，為替管理，開発のための資金調達機構などにつき，できるだけ網羅的に解説し，それぞれの特質について明らかにする。

山本秀夫・野間　清編
中国農村革命の展開
400頁　2000円

本書は，1920年から60年代を軸として，農村社会構造の把握，農民革命・土地革命の特質，集団化の必然性，諸矛盾の展開とその解決，人民公社と所有制の問題等，新進気鋭のきめ細かい論文で構成されている。

斎藤一夫編
台湾の農業　上・下
各 1800円

戦後急激に復興した台湾経済の歴史的経過をふまえ，その背後で着実・健全に発展した「模範生」台湾農業の，現時点における問題点・矛盾点を分析，究明し，国際的位置づけの中で台湾農業を総合的にとらえる。

南　亮三郎編
韓国人口の経済分析
240頁　1700円

可能な限り古い時代の人口記録まで遡り，韓国人口の増加趨勢や増加パターンを明らかにしながら，朝鮮動乱の災害から立ち直り1962年からの5カ年計画以後の経済成長のかげに潜む幾多の経済的・社会的問題をえぐりだす

アジア経済出版会発売